

Kanagawa Library Association

巻頭言 大学図書館の役割 ―求められているもの―	1
特集：2016年度新規加盟館紹介	2
研修レポート	3
連載：わたしのイチオシ「レンガ『ヨコスカ製錬所』 銘入」	4

大学図書館の役割 ―求められているもの―

鶴見大学学術情報事務室事務長
鈴木 仁代

平成28年4月より大学図書館協力委員会の委員長を務めています鶴見大学図書館の鈴木です。

平成27年度総会において承認された神奈川県内大学図書館相互協力協議会の本協会への統合、発展的解消を受け、本委員会は、標記のとおり、名称変更し、大学図書館に関する調査研究及び相互協力のための諸事業を目的として7名の委員構成で運営されています。また、大学図書館相互協力協議会から引き継がれ、本委員会の柱として確立された「神奈川県内大学図書館共通閲覧証」制度も運用されており、昨年度1館、本年度新たに1館が加わり、加盟館は44館となりました。

大学図書館は、従来、大学の教育研究に関わる学術情報の体系的な収集、蓄積、提供による教育研究支援、大学図書館に蓄積された学術情報の公開による学術情報基盤の構築が役割であると言われてきました。しかしながら、近年の大学を巡る18歳人口の減少や経費削減等の環境の変化を受けては、大学図書館に求められる課題や機能、また役割が多岐に渡るとともに組織や運営体制の在り方についても言及されています。例えば、インターネットや携帯電話の普及を受けては、情報の収

集や提供方法の在り方、学術情報流通における電子ジャーナルの普及に伴う、これらの電子情報資源へのアクセスの保証といった課題が挙がる一方、大学図書館以外の学内施設が所蔵する資料やインターネットなどの多様な媒体や形式によって提供されている学術情報の収集、蓄積、提供に係る適切な対応が求められています。

また、学生が自ら学ぶ学習が再重要視されたことにより、いずれの大学も、図書館の役割の見直しや拡充を行い、学習環境整備の要として、図書館におけるラーニングコモンズの構築や図書館員による授業サポートといった、従来の利用者教育にとどまらない教育活動への直接的な関与を推し進めています。更に、大学の一施設の枠を超え、行政や地域との連携を促進するべく一般開放や講演会、展示会等を開催し、大学図書館が持つ情報資源や人材の活用といった重要な役割も果たしています。

本委員会においては、これらの情勢を踏まえ、より発展的な大学図書館の相互協力のあり方についての協議を進め、連携を図りたいと考えます。

新規加盟館紹介

上智大学短期大学部図書館

上智大学短期大学部は秦野市の高台にあり、キャンパスから美しい富士山を仰ぎ見ることができます。学生数 500 名余りの英語科のみの単科短期大学です。図書館は教育研究棟 1 階にあり、開架式書庫と閲覧席 76 席、PC 用 4 席を備えています。ここに約 5 万冊の蔵書と雑誌 66 タイトル、新聞 15 種等を揃えています。

当館は上智大学中央図書館のシステム導入に伴い、2012 年度から学生が上智大学所蔵の図書をインターネットで予約し、これを配送サービスによって、当館で受け取りができるようになりました。こうした上智大学との連携により、所蔵図書を見直し、学生の勉学や進路選択支援強化のため、学問研究の基盤となる図書及び学際的分野や現代の問題・課題の知識を養う図書を主に集書するようになりました。よ



り専門性の高い図書は、上智大学から取り寄せています。

蔵書のほかに就職関連書籍、検定試験問題集、小説なども展示し、学生に身近な図書館を目指しています。

(事務センター図書館担当 酒井 明子)

新規加盟館紹介

多摩大学アクティブ・ラーニング支援センター

湘南キャンパス図書館 (SGS ライブラリー)



当館は、平成 19(2007)年 4 月にグローバルスタディーズ学部の図書館として開館しました。蔵書数約 34,000 冊の小規模な図書館ですが、カリキュラムに基づく学習・研究活動に必要な資料として、英語、各国事情、観光、ホスピタリティ関連の資料を中心に収集し提供しています。英語で行われる授業が多いため、和書と洋書は別置せず、原書と訳本を隣に並べて配架して利便性を高めている

のも当館の特徴の 1 つです。平成 27(2015)年には各国の駐日大使館に依頼をし、自国の広報に使用している各種資料を取り寄せて展示した「大使館資料コレクション」を開設しました。その大使館資料コレクションを使った授業も行われています。藤沢市民の方にも図書館を開放しています。

(ALC 事務課 (図書館) 河西 直美)

新規加盟館紹介

東京都市大学横浜キャンパス図書館

東京都市大学は1929年に武蔵工業大学として創設し、2009年に校名を新たにしました。

1997年に横浜キャンパスが開設され、図書館は情報基盤センターと併設し学生の学習、研究の場として利用されています。教育・研究に必要な「環境」と「情報」に関する書籍を中心に約13万冊の

蔵書があります。さらに電子資料や各種データベースなどの提供により効率的な情報収集をサポートしています。

学生モニター制度により学生との意見交換の機会を設け、変化する学生のニーズを積極的に取り入れています。そして学生が「図書館に来ると学習したくなる」と思えるような雰囲気の間をを目指しています。



(図書館事務センター (横浜キャンパス)
水上 恵子)

研修レポート

「講演：貴重書の保存と活用、見学：一橋大学社会科学古典資料センター」

(平成28年7月15日実施)

7月15日(金)、平成28年度(2016年度)第2・3回神奈川県図書館協会職員研修会が一橋大学にて開催され、一橋大学社会科学古典資料センター専任助手の床井啓太郎氏による「貴重書の保存と活用」の御講演と、社会科学古典資料センターの見学を行いました。

講演ではまず、社会科学古典資料センターの概要についての説明があり、沿革や蔵書数、職員数といった運営体制や、所蔵しているコレクションやミッション、資料保存に関する事業、保存方針の説明がありました。コレクションのなかでもメンガー文庫は、大正12年に購入されたものとのことであり、一橋大学の持つ歴史を感じました。

次に社会科学古典資料センター内にある保存修

復工場の概要と、保存対策の実例として、保存修復(低温処置(虫害対策)、保存カルテの作成、破損等の修理、革材の補修、保存製本)および環境整備(光線対策、温湿度管理、虫害対策、地震対策)についての説明があり、保存に関して様々なノウハウを蓄積して対策を実施していることを窺い知ることができました。

続いて、「西洋古典資料の保存に関する拠点およびネットワーク形成事業」の紹介がありました。これは社会科学古典資料センターが中核となり、全国の研究機関等が所蔵する西洋古典資料の保存状況の改善を目指す3カ年のプロジェクトとのこと、これまで蓄積されてきた貴重なノウハウを全国的に共有していこうというものです。

最後に大学図書館における資料保存において図書館員に求められることについてのお話があり、大学図書館に限らず、図書館員がもっと資料保存に関して積極的に取り組んでいかなければならないと考えさせられました。

講演後には、社会科学古典資料センターの書庫と保存修復工房を2班に分けて見学させていただ

きました。書庫は床井氏に御案内いただき、貴重な資料を実際に手に取って見ることができたとともに、個々の資料にまつわるエピソードも教えていただきました。保存修復工房ではスタッフの方々の修理や保存箱作成などの実演を見学し、その作業の手際よさに大変驚かされました。

(横浜国立大学附属図書館 本間 静一郎)

連載 わたしのイチオシ

関東学院大学図書館 「レンガ『ヨコスカ製鉄所』銘入」

本学の所在する横浜市に隣接する横須賀市は、「海軍の街」である。それは旧日本海軍の横須賀鎮守府が置かれ、戦後そのままアメリカ海軍の基地が置かれたことに由来する。現在も「よこすか海軍カレー」「ヨコスカネイビーバーガー」など、海軍にまつわる観光資源が存在する。その横須賀鎮守府は、遡ると幕末に着工された「横須賀製鉄所」(後に「横須賀造船所」と改名)に行き着く。今回ご紹介するのは、その銘の入ったレンガである。

横須賀の地に造船所を新設するにあたり、建材として大量のレンガが必要となった。「お雇い外国人」であるフランス人のフランソワ・レオンス・ヴェルニーは、これを国産でまかなうべく、同じくフランス人のポエルにその生産を依頼した。ポエルは、1867(慶応3)年にはレンガの量産体制を確立したようである。ここで生産されたレンガは横須賀製鉄所のみならず、観音崎灯台や品川灯台などでも建材として使われている。

本学に所蔵されているのは、この観音崎灯台の倒壊(今ある観音崎灯台は3代目)現場より発掘されたものである。ここで注目したいのが「ヨコスカ製鉄所」という銘である(鉄は鉄の異体字)。横須賀製鉄所は幕末の1865

(慶応元)年に本格的に着工され、1871(明治4)年には「横須賀造船所」と改名されている。その後幾度かの変遷を経て、1903(明治36)年に「横須賀海軍工廠」となるのだが、つまり、「横須賀製鉄所」と称している期間はごく短いのである。現に、同時代に同じくフランス人の手によって建てられ

た富岡製糸場でも同じようなレンガが発掘されているが、その銘は「ヨコスカ造船所」である(船は船の異体字)。

江戸時代、いわゆる「鎖国」状態であった日本が、開国の後に驚異的な成長を遂げたことは、例えば司馬遼太郎の『坂の上の雲』などでも活写されているとおりである。一見するとただの土塊にしか見えないが、これは当時の世界を瞠目させた「明治維新」の土台を支えた、貴重な産業遺品なのである。

※参考文献

菊池勝広・初田亨「横須賀製鉄所における建設材料の収集と調査研究—煉瓦・セメント・木材」日本建築学会計画系論文集 第587号 2005年 pp.191-197

『タウンニュース』横須賀版 2015年9月4日

ほか

(図書館室の木分館 逸見 義頭)

